

本書は岡田武松先生について初めてのまとまった伝記である。いささか値段が張るが、文中を流れる先生の教育、学問に対する驚嘆すべき情熱や、事変中気象事業に軍の介入を許さなかった硬骨漢ぶりを読みとるだけでもその価値があるだろう。

著者須田氏は先生の弟子であるが、いわば親疎中間の立場にあったと思われるので、伝記の作者としては適任であったと思う。全体を6章にわけているが、台長時代の18年間で3章をしめていることから、著者がこの間のことに最も力をそそいでいることがわかる。文章は読物風でわかりやすいので、思わず読みふけてしまう。

本書を手にして第一に私が知りたいと思ったことは、著者が先生の性格をどのようにまとめていったかということである。先生の性格は、巨人によくあるように、複雑であったといわれる。世の中にはざっくばらんに腹の中をさらけ出す人もいれば、自分の本心をおもてにあらわさない人もいる。先生は後者のタイプであったと思われる。したがって著者は文中に引用した沢山の先生の言動を手がかりとして、先生の複雑な性格を推測しなければならなかった。これについて著者は、事業経営のためには何物をも顧みない強い性格と、人間岡田の心の中にひそむ気の弱さのからみ合いが、外見上複雑で理解しがたい先生の言動を形づくっていると判断した。「岡田の行くところは時として2匹の狸が出没した。一つは目的達成のために意識的に演出した狸で、他は気の弱さのかもしれない幻の狸であった。これらの狸に人々は驚き、怒り、困惑し、うろたえた」という著者の見かたはその一例である。

つぎに私が知りたいと思ったことは、先生が台長といういそがしい職にありながら、あたかも手品師の如く、次から次へと沢山の教科書を出したその秘密である。先生が夜は講談本を読んで早く床につき、朝は早く起きて勉強したというのが当時の伝説であった。著者はこれに関し某氏の経験を引用している。彼はその秘密を知りたいと思い、ある早朝先生の官舎の板扉の節穴から中をのぞいてみた。「書物に向っている岡田の姿は彼の足を釘づけにした。岡田のきびしい表情は形容できないほどの

もので、全身を眼光に集中し、その光は文字通り紙背に徹するように見えた。」先生が「気象学」を出版されたのが54才で、しかもその原稿は一旦関東大震災で焼失したものを書き直したのであった。「気象器械学」が58才、また「理論気象学、上・中・下」は退職後間もなくで、67—71才のときであった。私は尻をひっぱたかれる思いがした。

先生の軍ぎらいはよく知られていたが、本書後半のいたるところにその反骨ぶりが見られる。山場は昭和14年に陸軍側が気象台の陸軍編入を申入れたときであった。このとき先生は、気象事業は各省に関係するので、特定の一省に所属するのは弊害があるとし、また気象学は発展の途上にあるから、現業と研究とを併行して進める必要があることなどを主張して、遂にその申入れをはねのけた。この時代のことであるから、先生はもちろん職と命とをかけておられたことが文中に見える。このことがあって2年後に先生は台長をやめておられる。先生のこのような芯の強さは、明治人にとぎとして見られるもので、全く驚くべきである。

そのほか予算獲得の名人といわれた先生の深慮遠謀でしかも事に当って迅速果敢なやりくちについてのいくつかのエピソードは一読に値する。また晩年（昭和27年、79才）大阪管区気象台での講話の中で、今後の研究のテーマとして放射、大気循環、降雨機構の3点をあげて若い技術者に研究の方向を示したが、これは先生の卓見であったと思う。

さて全文を読み終って改めて感じたことは、学問的にも社会的にも、いわば最高峰をきわめた人でありながら、終生を通じて淋しさ、孤独さがつきまとっていたということであった。とくに奥さんを亡くされた晩年は「絶望的な孤独」の中に過ごされたと著者はのべている。これが先生の本当の姿であったのだろう。

資料の多くが先生の弟子や後輩から得られたので、本書は師として下から仰ぎ見た巨人の姿が中心となっているが、一方他の角度から見た岡田の政策、学問、言動のきびしい批判もあり得ると思う。しかしそれは別の著作に任かすべきものであろう。（大田正次）